

# + 健活 クリニック

## 愛知県大府市 浅見眼科手術クリニック 浅見哲院長

患者が前向きな気持ちで眼科手術に臨めるよう、「癒やし」に注力している医師がいる。それが「浅見眼科手術クリニック」(愛知県大府市)の浅見哲院長だ。眼科手術を専門とするクリニックだからこそ、患者がリラックスできて「来てよかった」と思える空間にしたいと、質の高い医療の提供と心の弱った患者を癒やすことの両立を目指している。



「権威主義的な医師の患者さんへの対応を見てきて、それは違うんじゃないかと。医師が高圧的になってしまったり、弱い立場の患者さんにとっては高いハードルになってしまっています」

「権威主義的な医師の患者さんへの対応を見てきて、それは違うんじゃないかと。医師が高圧的になってしまったり、弱い立場の患者さんにとっては高いハードルになってしまっています」

20年以上にわたって大学病院や眼科専門病院で治療に取り組んできた浅見院長は、こう話す。名古屋大学医学部附属病院の医局長時代は、毎日のように網膜剥離(はくり)や眼内炎などの緊急疾患、眼球破裂などの手術にあたっていた。

「関連病院がいくつもあるため、緊急の患者さんが昼夜問わず送られてくるんです。一手に引き受けて、無我夢中でしたね」

眼球の中で起こるさまざまな病気の手術を経験して実感したのが、医師と患者の信頼関係。両者の距離が遠くはいけないということだ。

「手術はほとんどの人にとって怖いものです。医師が『緑内障の手術をしましょう』と言っただけでは患者さんを不安にさせてしまう。理解してもらえないようにしっかりと説明して、イメージが持てるようになれば、不安を減らすことができます」

クリニック名にあえて「手術」と明記したのは、浅見院長がこだわったポイントだ。

ですが、自分の一番の強みを出した方がいだろうと。患者さんにとっても分かりやすいです。名古屋市の愛知の三河エリア、岐阜県からも患者さんがいらっしやいます」

クリニックを開設したのは2021年7月。コロナ禍での船出となった。

「不安はかなりありました。周りの人に開院すると伝えると、『今やるの？ もう少しコロナの様子を見てからの方が』と言われました。ただ、自分の年齢が50代になろうとしていたので、これが人生のタイミングなんだと思いつきました。延期するのではなく、前を向いてやろう」と開院にあたっては、最新の手術器

## 白いピアノが出迎える

## こだわりの癒やしの空間で

## 患者との信頼関係築く

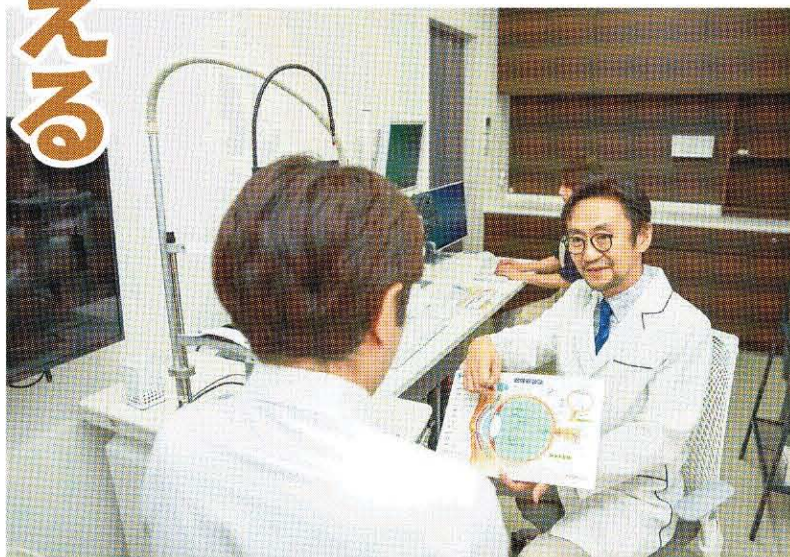
「喜んでもらえることなら何でもという気持ちで置きましたが、他のクリニックにはない特徴になっています。来てくれた患者さんが楽しいと思える場にするための『おもてなし』です」

人間は外界からの全情報の80%を視覚から得ているといわれている。「目」は身近で重要な臓器だからこそ、病気になる不安になるもの。特に加齢に伴ってリスクが上がる緑内障や白内障が代表的だ。

「視野が欠けていく緑内障は、両目で補い合う分、中期になるまで気づきにくい病気です」

一方で、眼科治療の技術は以前と比べて進歩を続けているという。器械もまたしかり。緑内障も早期での発見・治療が可能になっている。「現在は網膜を検査して神経線維が薄くなっているかなど、器械で測定できるようにになっていて、ごく初期から分かるようになっていきました」

「目は小さな臓器ですがすごく精密にできています。手術をして翌日からよく見えるようになれば、患者さんにとっては大きな喜びでしょうし、私としても充実感があります」



浅見哲(あさみ てる)「浅見眼科手術クリニック」院長。三重大学卒業。2004年に名古屋大学医学部大学院を修了し、医学博士を取得。名古屋大学附属病院、豊橋市民病院、総合病院南生協病院などを経て、21年7月から現職。一貫して眼科の手術を専門とした診療を行っている。

取材・磯西賢 / 写真・飯田英男、浅見眼科手術クリニック提供